

精神科病院造形教室において表現するということ

～自由な表現、「居場所性」、他者とのコミュニケーションを中心に～

京都造形芸術大学 藤澤三佳

1 目的

この報告の目的は、家族からの虐待体験や学校におけるいじめられ体験、自殺未遂等の生活史をもつ精神科通院患者をとりあげて、当事者の自由な自己表現と、他者とのコミュニケーションを重視するH病院の〈造形教室〉においてどのように再び「生」が模索されているかを明らかにすることである。本報告では、報告者がこの造形教室と共に開催してきた展覧会時の映像記録を示しその意義を検討し、またメンバーの生活史とアトリエとの関わり、作品の変遷、それを可能とするアトリエの自由な性格及び居場所的性格に関して示す。

2 方法

データとしては、外来作業療法科の枠内で、自由な自己表現活動を実践しているH精神科病院造形教室の活動を調査した内容を用い、上記展覧会開催時の参与観察映像データや生活史を中心とした2017年におこなった聞き取り調査データを示す。展覧会時の映像は鑑賞者（勤務大学学生）とのコミュニケーションを示したものである。上記映像データに加えて、聞き取り調査として得られたデータとしては、描く環境である上記造形教室における「居場所性」や、そのなかでどのようなプロセスにおいて自由な表現が可能となり、精神的状況においても当事者の満足感が得られているかに関して、描く絵画作品の変遷を示しながらとりあげて考察、分析をおこなう。

3 結果

分析の結果、当活動は、医療の世界やアートの世界という枠組みにとらわれない日常生活に近いコミュニケーションがおこなわれていることがわかった。通常、精神科通院患者では見られない、展覧会時における鑑賞者とのコミュニケーションが自然におこなわれ、また、造形教室内におけるコミュニケーションに関しても、治療や絵を描くことに特化したものではなく、「今の私には自分が今生きている帰属場所ととらえています」というものや、絵を描くこと自体が目的ではなく、「普通に呼吸するために、この場の空気にふれたいから来ている」などの「居場所性」を示すものが多くみられた。この居場所性が高い造形教室の環境のなかで、作品だけの評価を重視するのではなく、治療としての位置づけのもとに描かれていないことから、表現者の表現に対して、自由な雰囲気のもとであえて口出しがされていないことが確認できた。このことにより、表現者の自己の変化（表現者当事者も驚く：「I」の出現）、新しい表現が生じ、その新しい表現に躊躇しているときは、メンバーが共感して背中を押しているのがみられた。

4 結論

以上から、メンバーの生活史は、学校でのいじめや家族のなかでの虐待がみられ、精神科通院により、その後の社会からの排除がみられたが、そこから、治療やアートに特化した活動ではなく、日常生活に近いコミュニケーションがおこなわれていることにより、他者とのコミュニケーション、造形教室の居場所性、自由な表現活動によって、再び「生」を模索する活動としての性格を示していることの意義が明確になった。

文献

藤澤三佳, 2014, 『生きづらさの自己表現～アートによってよみがえる「生」～』晃洋書房.